

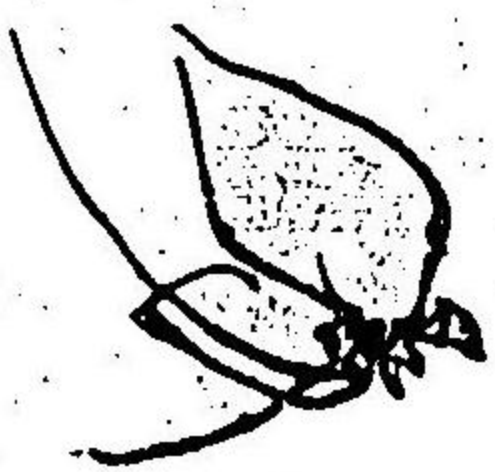


八百屋於七

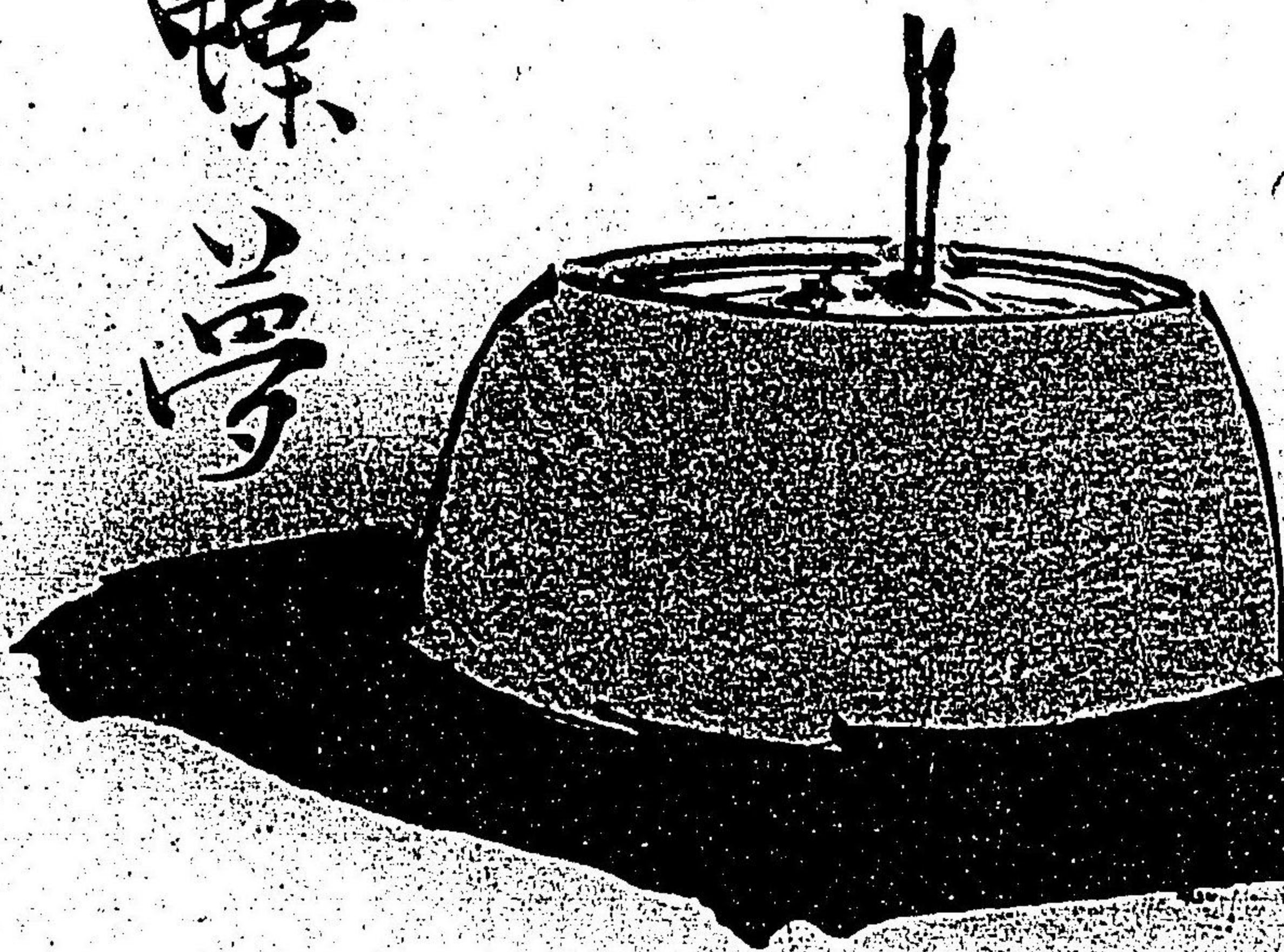
104

八百屋

阿七



阿七蝶亭



特43

04

序明治二十年二月九日内務省交付の

坊間の謄寫本に八百屋阿七實記と稱する者尠ありきと雖も其實

其虚確証をも能くいそ此編の如き實録中の尤實なる者ふして信を措

く是を著し取り網羅蒐輯せしあり抑阿七として方今文明の盛世ふ

束縛と脱し自由結婚の説を唱えしめ情人の爲し其

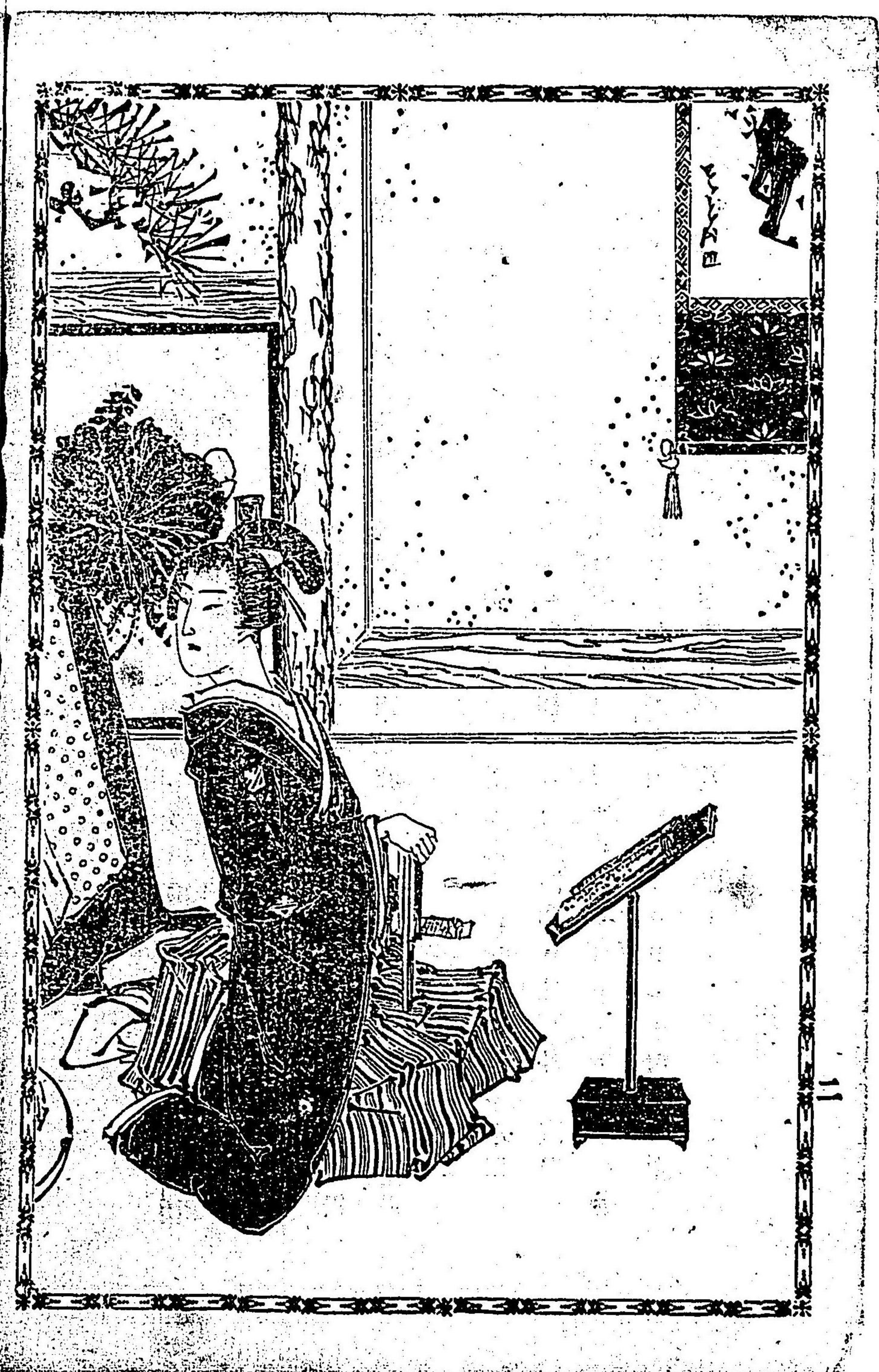
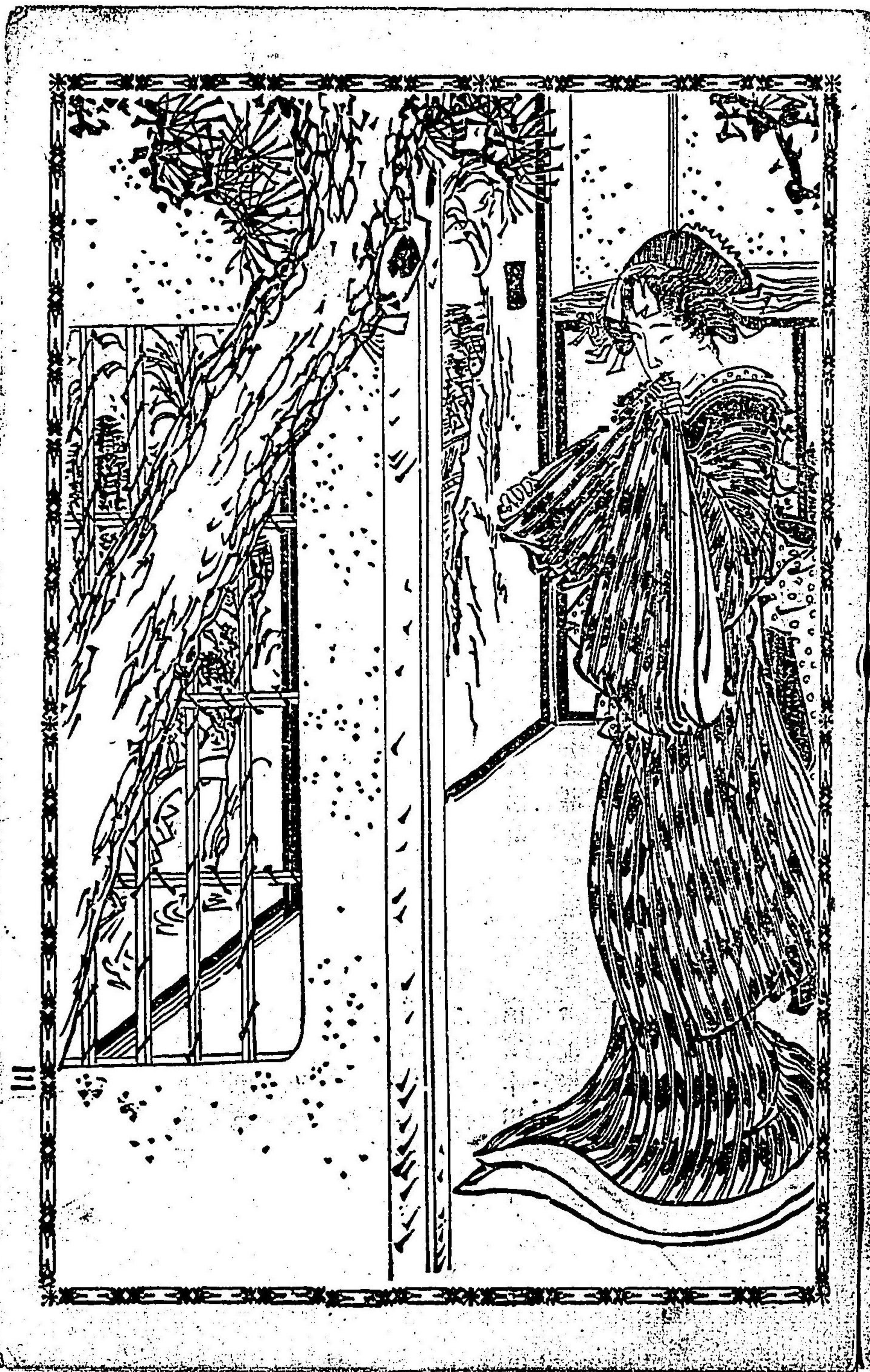
情と遂に共妻共白髪と榮え天年を全ふせんし惜むべし刑法の峻な

る嗚呼憐れまさるべけんや悲まさるべけんや看客

阿七が痴情を去て編者と俱し其靈を吊せよ

明治二十年一月

神民子誌



胡蝶夢目錄

- ① 八百屋三代の興廢久兵衛の愁心禍災娘及ぶ事
- ② 油屋武兵衛於七と戀慕して恩とわたへて娶んとする事
- ③ 武兵衛金と賄ひてお七と乞ふ久兵衛お七と嫁せんと約する事
- ④ 久兵衛賄ひと得て武兵衛と約する事
- ⑤ 出火して家内吉祥院へ落行油屋惣兵衛途中狼藉の事
- ⑥ お七吉祥院吉三郎へ戀慕惡僧辨長文をひろひ武兵衛へ内通の事
- ⑦ 安井家の士利倉十内吉祥院へ至る武兵衛狼藉十内と繋る事
- ⑧ 利倉十内吉三郎へ諫言と加へ母とお杉お七へ異見の事
- ⑨ 久兵衛お七と油屋へ嫁せんとするお七火と付めしとらる事
- ⑩ 日暮上人お七が助命願ひ上人胡蝶の夢みて悟道と得事

以上

八百屋 胡蝶夢全

① 八百屋三代の興廢久兵衛の欲心禍災娘及ぶの一件

父の精糖を喰ひ子の精饅は飽孫の遺穂を拾との商人三代興廢の速といふり道里は江戸本郷のわたりは八百屋久兵衛といふ者あり起り葛西の土百姓なりしが本分老實漢みて耗糧よりとる賚の蕪菁大根と脊を荷ひ八百八町を賣り弘め後より擔負と店を移し場所よきとある借店を藉り手一菜を採掘へ在所の村への借し入爲入し四季の初産開端は紫蘇椒芽野蜀葵雞腸菜お土筆菜蓴菜薑から蒿昔は滑公英春の一首の賣出より夏は茄子は諸瓜竹筴秋は松茸は芋茨菰小町蓮藕つくし那お一箇だも没きものなく店を飾りし七重八重大第は儲けし金銀は借屋は直も買ひもとめ八百八町と賣家とし積重たる八百八品是と八百屋と道ざらんや家主の這年六十五才嚙日の能き人なれとも三年而方中風の病手足の癱瘓て便ねと調保より甚底の不足もあく任せぬもの人の命遂は其年秋の野邊北邱の煙とよその成よけり跡お繼く子の久右衛門として這年盛りの三十八才親も似ぬ子の鬼ならて生れの儘ある嬌養窳落の附弛どのよて有無のとい禪等則も任せ花は狂ひ酒と糞まよし柳巷花街を大路とし西へ遊び

東より走り遂に荒淫乱酒の爲に厚き病に掛りて既死に垂々とせり久右衛門重き枕を擡げ我女房おむかいていける人死するときは眞生よかへるとかや我れ慮らずも胡行孟浪の周旋と倣し生理と齒痒ふし營生と願を老父難難漸摩して儲たる蓄積と土の如く氷のとくお耗費し家を滅し身と失ひ黄泉に至りもし釜々逢ふとわらば何の申理かわらんや今我の痛悔死しても目と閉ざるものはなり我の死もはや今日お逼れり我れ多情にして幸せる子もなし又家督の養子せんも家業か異なれり因便旅設に至るまで兩三年も歴ぬへし其間おの資財轉々托損じて破落とへしよし又養子とても指頭とる方もなければ冀望の家姐甚摩兵介と再耕ありて此家と繼興し枉よと兵介も召來せ涙を咽て托けるよそ二人も拳局剪盛辞とるといへとも呀意なや立刻死に近し疾々と盃蓋と出させ否客分説お婚酌させ歡適容して睡るかとくお死し逝けり話説道の兵介の河内の者おて十四おして江戸へ出八百屋久兵衛方へ小圃ふ來り生質幹者よて手迹と能し習はずして算勘お懸く搬運拮据よく一ツとして要捷者なりしおば只類愛撫して他お渡さお既お十四五年も隨從し當家よも管家よも只一人の精勤の親久兵衛も當年の相應の妻とも呼び久右衛門の後述ともなさはやと思ひし間よ

病氣お懸りしと久右衛門も能く知りて此場の譲りもなせしと見へたり妻兩夫と重ぬるの恥あれども死期お夫の宥して家の爲なればとて自ら盃盡まで配はしたるとなれば今更お辭固かたき遂は是より夫婦となり先久右衛門の遺言なれば是より久兵衛と名前と改め夫婦伉儷手足更錯拮据して素の資分お復起さんと辛勤節儉と要として日夜息するの日もなく万事中よく暮らせし其年の暮めでたふ一人の女子と産りり是なん八百屋お七とて後世までの物かたり因果の種お是非もなしされば量お限りあり寸も長さ所あり尺も短き所あり兵介の久兵衛お仕るときは必らお寸も長けれども久兵衛と成て家と繼く時尺もまた短き所有けるおや元來兵介久兵衛の生質才幹の有て健捷なる者なれとも天性吝嗇おして富貴お諂ふの情おかく内の生過の牛の毛とむしりて虱ととり蚤の頭と割て二ツ用ふが如くおれば日々お寛愆なる儲なく彼お利と得れば是お損し何となく商賈も狹隘なりて賣家も早晚とる減し心の日々お狼賤なり下れども利と貪るとい峻奈ければ蜂の集る軒と避るが如く誰れ買ふ來る人もなく月日の過るお矢よりも速く左右する間おはや十五年お及べり有繁寒食郎の一徳おや食ふお切不足おなければとも風雨の禦ぎお恐びおたく那里道里と回護へとも我より志



たる蓄積もあゝ外の人の賑濟くれる者もなく誠小窘迫屈滞してまた如何ともぞへからん今  
 もし這家と賣り商賣と止て先々久兵衛殿への恩儀立せ又久右衛門殿の吾妻と我を娶らし  
 て家を譲られたるの義理立せ先向當分説なきの女房の面下位僮既十五年の間尾証ある  
 魚とも與へず曠かましき一衣も着せず甚底の面目有て破落戸のたと告んやまた町中も我  
 れ此家へ爰奴ふ來り今若箇の東道と成りしも器量あるもゑと稱せられし汚面と見世店  
 を破却して人々笑ひれんの體面の醜きと死ぶ勝る恥辱なり我また死せんまとい易けれども  
 妻や娘の難儀と見捨て黄泉に至りてもし久兵衛殿や久右衛門殿逢なば何を以て分説せん  
 やと只願心猶豫してさらゝ決せず夫智足らざれば偽り財足らざれば盜まといへり惣じて  
 人の心の貧乏れば必らずしも乱る悲しひかな久兵衛娘と花街お售んとよの移らねども万望  
 富家と縁を求めて我が薄助ももどべし可憐風流の狂客もかな春情を以て挑しめんものと  
 久兵衛の蓬心の起れるの悲哉阿七の災ひと得るの基本あり

予十歳ばりの頃なりし古郷は篤芳尼といへる僧婆の有し其齡九十四あして幼女の  
 頃より故ありて江戸お育長し八百屋於七の行狀と話説されしと小耳は聞き其尼のいへり

けるに我れ其日の旋室官事ありて見物を行ざりしが局中婢使の話説をきけり於七其日は  
 練れさまの年齢の十六といへと十四五と見ゆる花娘子なり鴨郡内の振袖と着て背手よ  
 馬上に縛られたる風情さとの八百屋の娘なれば吉原深川の風流の治妖もなく又銀杏のお  
 藤笠森おせんといへるほどの風言ふいなければども柳腰と窈窕おしてさながら牡丹花の雨  
 よ卓めるが如く居る人行人口々よまた案慮なき小娘子外よ沙汰のなきものか袖と  
 濡らさぬ人もなく森よ聚る人々も驚破火と懸ると見るよりも皆一同お目と塞ぎ南無阿彌  
 陀佛南無妙法蓮華經數千人の廻向の聲谷響の森よ響く音淺ましかりしとなりと話れり心  
 ちる人の久兵衛と嫉み己の客齋深窓より一人娘と火よあぶる親も鬼の有けりと嫉まぬ  
 もののなかりしと聞けり後また尼の壯盛の時お吉三坊主とて江戸口々よ濡佛と立てお七  
 の罪業消滅の爲とて勸化して巡りし坊主あり道坊主の知りて居れりと予の十歳ばかりの  
 時お聞置たるまよ爰お奇説と擧て後人よしらしむ

○油屋武兵衛於七よ戀慕して恩を興へて娶らんとする一件

富て奢らぬのなく貧おして諂のぬのなし貧うして諂ふの猥賤の人と欺し賺して利と食らん

との志ありあ故お八百屋久兵衛の已れが客齋のもろお譲りの家道も早晚となく手窘今  
 はや若箇ともとへからず先主人の義理といひ女房の面下世上の面體一時よ身よ遁り右お  
 支へ左お支へせんとせなければ本性貪惡の志と内よ巧み娘於七よ豪家の妾おもやらばや又  
 の世間の嫁入の分よして遠く人老らぬ京大坂へも鬻ばやと乖巧のまてあれとも卒忽お女房  
 おも談じがたく又本性よ願されば願はしきとあもあられ少しし身よ耻て竊お無念の牙  
 を噛とあれとも遺瀾なきおと思へり道里お上三丁目お油屋武兵衛とて豪魁の油問屋あり  
 親父の去年の春死去せられ内母一人あて兄弟とてもなく管家七八人も遣ひ家裡二十人余も  
 追廻し日々繁昌の家なり富の敬わるならいよて上下三町目の間いそれ東道と稱せり  
 道東道當年二十四おして先東道去年存生の時縁組のと彼是と商議もありしかとも逢ふの缺  
 け逢ぬの就らず遂其内よ先東道の死去せられて于今無妻よして妾一人を置て當分の渴とら  
 やせり子お嬌の母のならひ別や金銀の自由なり一日も速く嫁と呼びかへたく諸々方々と聞  
 審ひ既よ就りて見合よなれに斷られ母も焦心て此うへに家族も寄らず貧福もよらば武  
 兵衛の氣よ應じたるものあらひ呼び迎ふへし調度支度の道方から爲へし手代其までも努力

して穿鑿し求べしと母より仰出されしかの是隣俸と醜管代の惣兵衛といふ者武兵衛も隨  
 従して西より走り東より走りて倭の賄財貪らんとを巧めり武兵衛もまた白小賊の盜とる如く娘  
 子の有家と垣見してを廻れり然るも四町目の八百屋の娘を聞出し一望見まはしく一日  
 其戸前と彷徨して躊躇せり久兵衛の三町の東道のとなれば見店の内より竦跪頼適とれば  
 含笑して會釋し通れり翌の日またもや來りて脚躡しかば久兵衛趨り向へ些許下さるべし  
 と座と拂へば愕然として店頭を倚り上野寺家方へ献上の椎茸五十斤ばかり買得たし佳品  
 の畜へあらば見せ給へ不遺買取べし久兵衛跪まり頗る蓄へあり珍寶を備ふべし熱間店中  
 あれども醜醒といとはは請上り下さるべし娘子哩於七哩珍茶拿來といふつと土藏へ椎茸  
 と取出しお入れり頓てお七の茶を携へ珍茶一ツ進上せんと捧出と茶盤と取る内も頭囁らる  
 の耻かしさよ茶臺さし置さ其儘は翻々として内に入たり一飲の茶の咽と潤と甘露の如  
 く覺へ今一ツ乞ひ求んものとおもふ處へ久兵衛の椎茸携へ珍待遠ならんと謝し椎茸のま  
 なくさし並べ彼是ととむれども恍々惚々として心這は椎茸あはれいづれ椎茸の善  
 も悪も皆買求べし椎茸のみよあらず山も川も買求むべし以後道方の宅へも出入致さるべ

し又諸用事もひらば竊よいと聞されよ三十五十等の金子の儀の表面手代共は酌酌よ及ばず  
 何時もや越れよなどいと懇切ある頼爲よ涙とながし有難がり自眞の私しも近年の多風雨  
 みてサ、左様お聞たり當日全家のいくばく箇人を僅よ妻と娘と下婢一人のそ休怪な造化  
 の車の輪の如く運の來れば左様なるものよあらず誰か一人負荷して鼎力あさるものあらず  
 切の勢とるとあらじ令愛の春齒幾年を曰く未だ二八よ及ばせ断要なしよて朝暮母の嬌養あ  
 長せり否々鮮妍たる一箇の好娘子なり愛とべし愛とべしむかしより娘子の美麗は頼りて父  
 母また富貴と得ること證とくなのらと頼て長婿殿と得ては夫婦も逢暮とへの樂みとも傲と  
 べしなせ道て歸れり久兵衛の茫然として何の縁由としらさ熟々三思とるよ這就ら儂娘子と  
 懸率とるの結構ならん此上もなき造化もはや金坑を得たり何あも爲よ娘と縛けんものと深  
 く妻も隠し獨咲して後の禍いよ招けり

③油屋武兵衛縱放不行金を賄ふて於七と乞ふ久兵衛賄いと悦んで

竊よ於七を嫁せんと約とる事

人の想よ善惡の九相ありて争奈と爲べうらさるものい裏得たる所の生質なればまたいかん



ともどべからずたとへ悪相の相ありとも常お慎んで教と守り人と交りて能く和し能く諷ら  
 ば人誰か悪んや常よわれと縦放する時の生質の悪相しきりお現れて爲る所就と所内外お  
 出て人よ思み避らるるよ至るまのれども自己の其邪まなることをまらず何んとなれば我より  
 出て外よ制するものなき故なり土豪富有の人の家の子お有ものなり油屋武兵衛の原より富  
 有よ生れ飽食煙衣お育たる者なれば人表も能く脊高く尙白おして面躰も具足し常よ上田  
 八丈結城袖といふ處おして男自負の多有惚おして譎然として贊と張り謙とけき酒と縦ま  
 ふし色お乱れ青樓花街と徘徊して粹と辨じ通と論じ伎婦と詰り鴉母と屈らせ青鳥と弄り拳  
 酒よ喧嘩とし出し那一箇として愛とへさ所るく這由お春城遊廓よ至れども人よ思るゝと  
 仇讐の如しまかれども金衝悪馬と駐め金鑄よく堅と射る奈せん財用の盡さる醜しといへど  
 も又争奈とも爲べのららず酒家青樓の服する處なり這故お益々威色と振ひ六國の猶我が麾下  
 おわりと贊し人の色と得げ口舌と唆け人と誘り人と嘲り縦腹は遊里と横行せり後よの武兵  
 衛に至る所の青樓へ人皆行とと止めたりしかば青樓も又門と閉て癩人と忌の如くせり鍾  
 室中お撃ば其音四方よ響く誰いふとあく油屋武兵衛の刀技不行の者なりと人避て交るも

のなく況や縁と結び婚ともとむるものあらんや此もあるお八百屋の娘お婚と求んと計較たる  
 ものあり油屋武兵衛も兩三日の八百屋へも來らざりしが這日遊興の歸りとして手代惣兵衛と  
 共お店頭よ來り暫らく腰かけ茶と乞ひ烟草兩三管と吹き恍惚と娘の風姿と眺て左右それと  
 も久兵衛も出されば不興して去らんとそれば女房會釋し今日の折おしく久兵衛の他行なれ  
 ば再度お出もかなと立送り歸しけり武兵衛の別は側町の行戸よ入り酒と出させ一兩盞を歴  
 して惣兵衛お見せや娘子の風姿木綿の兩翼と雖ども翮々見々として細腰また柳の如し艶顔  
 鮮妍として楊蛾咲を合ひ誠は今時の風流千金買なり我是を得んとするよ橋なし汝我爲お  
 求得たらば白銀百兩と興へし萬望汝が才奇をもつて我よ娶しめんやいるや惣兵衛盃盞と傍  
 めさし置き且笑つていふ東道何ぞ其ようお惚し給へるやかの娘として妾お做んとさへ別よ  
 難きとなととなし矧んやかゝる豪富の奥室よ選へ給へんと那剛の僥倖怠慮是よ過たるとお  
 らんや只今久兵衛と這里へ招き密直よもらひ獲て東道よ獻じ奉つるべしと言語巧よ言おし  
 らへけるよぞ武兵衛の惣兵衛の言れ速かなると悦んで竟お私宅へ立歸りける久兵衛他出の  
 去來おけ油屋の手代惣兵衛も行達けるよぞ折よしと惣兵衛久兵衛と扯て直路行所へ至りま

づ酒肴ともて久兵衛は薦め扱物兵衛いよける。先日より這方の東道慈父の所へ参られ馴染  
 おもなられしよし。夫は付怎麼とみや此方の東道娘お七との分外氣は入萬望もらひ請度  
 との思召し入知得了とく。這里の東道今もさだまる室室もなし。是迄も先老爺去年急なる  
 病死にてかく運々せり勿論どのようなる豪家又ハ武家方のお娘お七より養子分よしして  
 らい受ると諸方よりも納れられ共母も武兵衛様も分外器量好むよふの貧なり却つて  
 心易くして萬事ふよしとの慮外ながらかよふやせば些失禮ながら慈父の爲にまづ福徳  
 の三年めとやらやもの疾歸られて内室も悦ばしめ給へお七とのも春花の娘子男よし  
 有財幾烈と極て早く應報せられよと偃蹇擡て言ける。お七久兵衛も憶悪き分説といおもへど  
 も胸裏計較事なれば今さら止了べきもあらで朝々の御助御看顧のほどよろしく願ひ  
 参らざるなとひたそら諂服ひ速蚤と八分よの就たりと大に悦び足とはやめて我宅へ立歸  
 りける。お七家内もの恚やらん逸興氣は打擧てはなし居ける。お七久兵衛最も昔首尾なりと猶  
 も隣隣と窺ひ居たりし。婢女の杉打笑ひていふ。そもや世よハ邪忌な男も儘有の中よ。邪  
 の油屋武兵衛とやらいふ人色も白し男もよしとよ。かふとの難もなけれと肺臟からいや

な醫設容頃日から三四度も來おつてお七様を穴のあくはと邪忌目つとてして闕めて居まし  
 た。この油屋の嫁ゆても賞ふといふて。さんじたら。お七様はなた。とよなるへと。尋ける  
 よ。久兵衛の道ぞ大事と猶も耳と凄して立聞居ける。お七のいふたとへ千貫萬貫の豪富で  
 も氣の善ぬ所へ配とい忌又作麼貧よくらしても。たがひよまよる潔よふ夫の心の信やかな  
 るよと願ひしからせやとりわけ那の油屋の武兵衛。面観るとさへ邪忌しいと立聞久兵  
 衛胸算さつぱり組語と猶も心とり直し娘かく武兵衛をして忌嫌へとをよし先祖の遺蹟  
 立のたき則ハ其身と苦界よ沈めんも時の薄命ならば是非もなきことならずやそれさへあるよ  
 今油屋の御閨嫁様と呼れんと乍の不足か是あらんや嗜不嗜といふの必竟自己の縦恣主人の  
 ため親の爲賤し誑して遣んものと只管氣と苛ら胸の火と消そ水もなく火お火とろへて一人  
 娘れお七とバ了罪人と傲せしど因果といふもおろかなり

④八百屋久兵衛賄金と得て堅く約そ其夜失火して家内吉祥院へ落行

富て奢らぬいあく貧しくして諂はぬもなし久兵衛ハ萬望娘と油屋へ配し素の資給よして亡  
 主人二個の義理とたてたしと區々心と費しけるといへども夜來の光景おての中々得心も傲

まじ右やせん左やとれも煩ひける中油屋の手代惣兵衛入来りけるもへ家内の聞んことを怕  
 れまづ二階へ誘ひ茶煙草と薦め久兵衛只願身と屈して惣兵衛は詔ひ居けるが惣兵衛懐中よ  
 り隋金三十片ととり出し暹日結納も参らとべけれともまづ夫迄の雑費の費用も有べけれバ  
 儂等の寸志ふて東道より送られ侍る所なり儂不足の義もあらば復々や越るべしと昂然とし  
 てさも無禮な申述べれば久兵衛の金と見るより雀躍身と轉じておし戴き未だ婚配も半なら  
 ざるも數十片金玉謝するも言葉なしまかし妻儀折悪く不快よて打臥し居ゆへは近日得興す  
 きかせ渠等も悦ばせやべし否の義の萬事よろしく傍回護憑入る所なりと言巧へけるもど  
 惣兵衛も安堵のていよて此上疎略の義の有まじけれとも一日も速く回詞せられよと言葉の  
 まして販りける這隣賢と妻とお七いかさまも且訝しく障子蔭より立聞して妻と娘も大ひ  
 よおどろき扱ふそ一人の娘子と姓へよして金と得んとは夫なづらも漢縁の心やと泣入お七  
 と宥めどかし必ら走氣づかふとよあらず逆ももの通り卅兩の金までとるくらゐのと今さら  
 思といふたりとてよもや遣すよいれくまじけれは今宵竊は道の家と立退高西よの先久右衛  
 門どのの所縁もあればそれと憑みて此難と逃れ油屋へへ行ぬよふも母のよくく策るべけ

れば必ら走深く歎くべからずと家常の物など治行し徐々逃出んとなしけるも主人久兵衛其  
 形象とはや知りたるもや夫といなし杉と呼彌介と呼び今宵何とやら心澄かたき夜なり  
 南斗低ぬうち門戸も裏面も閉て寐は儂門へ出るものあらば儂も告まらせよなど妻娘もさけ  
 うしお喚りし其身も馳て臥寓あ入り夫火盛んなれば水と燥し水盛んなれば又よく火と  
 消と水火半刻もなくていならざる物なれ共亢るとさひ災ひと生を既よその夜も玉滿頃母と  
 娘の霽よりの憂悲みみ夜も寐られせ耽々として睡眠中庶の軒火もへ出で折しも夜風の烈  
 しくしてばつと燃たつ程まをれそりや火事よと噪きたち母の娘の手と引て倒々轉々逃  
 出る久兵衛の一心不乱金と切と腹あまきしめ大音あて妻子と呼たて疾走よ疾出よと喚りし  
 其身の直よ佛間よ飛入祖師様と搭抱へ帳面と手よ提て表の方へ逃出る杉一人の意氣く敷  
 内義とお七と先へよのし我身の跡は残りて簀笥とゆけ小袖七八ツ裏袂ながら背あ負母子と  
 暮ふて駈出る彌介の強力手も當ると幸いふひせうも倒さ菟廻る早四方は火廻り八九軒の延  
 焼なれども皆々手強救火もへ早速お鎮りのえたれども久兵衛の抵塵灰もなき丸焼殊更火許  
 のとなれば丁内宿老の結正ふて一先菩提所へ落行追ての沙汰と待給へと内意あよつて

久兵衛の吉祥院へ急ぎけり此刻油屋武兵衛の久兵衛の丸焼ふなり親子零々迷ひ出たりと聞き竊も惣兵衛の耳語さばやく尋ね探して引どらへ那里の粗房へなりとも情をかけて入置べし我跡より至りて母の金と與へ幸ひは娘と諱落し我他年の念ひとはらとべし此舉止よてい定て嫁入もはてし有まじもし母親他の巨碍等あらば威して成共はるべし然而后久兵衛夫婦のものへねもふまゝに普請として安慰は仕込つかわしなば渠等の十分ならずや必せ失落る做果下よと自己外袍手早く脱て與れば惣兵衛大いさり出し斯有がたしと尻ひつ捲げ跳ぶごとく走りゆき那里這里尋捜しけるは漸々と見當り夫と見るより惣兵衛小腰を屈め會釋して扱々今宵の存じ懸なき急變さぞかし畏難察し入處なり就ての斯多家内打連れ乍所か涉ましゆぞや主人武兵衛中属の幸ひ此方邊の潔素なる粗房もあれば誘引すべしと言属たればまづ一此邊へ涉入下さるべしと俄懸懸痴呆丁單母の會釋し涉まんとじの涉情有がたくのどんじまそれと久兵衛も不慮の變よて今晚菩提寺吉祥院へ落るまゝ私しども直横れ寺へ参りませねば家内もあんどまどるもへ武兵衛様へのよろしく涉禮涉下さるべしと言けるおど左様ならば涉内義の右も左もお七との此頃久兵衛どのへ附妻よや受置た

れば必是此方へ涉選與し有べしと己も狼藉も及ぶべき躰なれば事ひづかしと娘と共に逃出せばそふいさせじと擁止るを彌介の大い怒りとあらわし惣兵衛が首頸捻て擲のくれば惣兵衛あゝぞと威しの脇ざし彌介の無手よておしらひかね其間お母の辻番所へ馳入り涉覽のごとく女ヨりの途中よて狼藉ものよ出合畏難いたしゆあわれ涉援下されかしといふけるおどよりや撲害せと一勢よ長棒引携赴捕巡の斯の協じと惣兵衛の逸足よして逃去けり

⑤ 八百屋久兵衛親子吉祥院寺落付油屋惣兵衛途中狼藉の談

財の善人と活し又善人と害と人皆財の人と活とと知つて人を害とるととえら老老子よ曰く慾多ければ身と滅し財多ければ明を蔽ふと久兵衛今曉菩提寺吉祥院へ落來り上人へ委細を懇しお早速承允しとり敢て先酒飯と進め一寐入して氣と鎮べしと別房お臥しめけるお未ご妻子の行衛も知れざれば心の離々お惱煩怎麼まれば箇も造化低の属來るかなと悲嘆のなとご更お不止了今いはや只燒盡了脱得赤條々お成たれば旦暮の薪烟も立おたしいよ惣兵衛よ請入此三十兩の金と資とせざれば今さら詮とべなし何分妻お商議とべしと益々慾念いやまし其日も卯の時頃よ至り妻娘お杉彌介諸共お漸々涉寺よ尋ね來りしお久兵衛悦ひ頓

て上人も出迎ひ給ひ今曉の變火途中意なく來りしと悦ぶと限なし妻子の吻と吐息つき今朝程漂迷來る路條ふて油屋惣兵衛追來り其邊の粗房へ住置べしと武兵衛より申屬たればゆるく入入り下さるべしなといろく言まわしけれども何とやら氣味わるく斷りいふて退れ去らんとなしけるお惣兵衛救圍して左あらば娘一人の留置るべしとお七を引立めかんとせしを彌介執て擲除ければ惣兵衛大お怒りと現し其儘脇ざしと扱て切て懸りし彌介の無手なり是非なく殿方の彦郎かゝまらね其女子計の途中の難義彦惣惣は彦救ひ下されたしと恐けるよ辻番の侍心得たりと長棍をもつて捕圍けるお惣兵衛とやおもひけん逸足出して遁失けり今曉の火事といふ惣兵衛の狼藉と申信も心も億ならず倍々主か主なれば家來までの惡黨もの幸ふじて此お寺迄脱れ來りしなりと涙と共お物ぶたるよを又もや思案阻斷黙してまばしり言葉もなくかゝる所へ油屋武兵衛いと爽かお出立一僕も提盒の袱と取もたせ支關より入來れば倉零まを又油屋と母と娘の一間へ遁入隠れけるよ武兵衛の縦容として入來りまを上人へ會釋し且久兵衛お打面ひていふ夜來り不慮の變難彦居宅も残らぬ焼失無かし彦當滅察し入處なりまかしまづく別よ彦打撲もまれなき隣隣大悦至極せり上人様よも

大勢の彦厄介猶此上よろしく憑存せるなど。はやお七が聲のいたる挨拶よて疎意なき体お會釋けるお久兵衛も敬々しく禮を返し彦懇情も。さつそくの彦調詣何ほどか添けなしと只願詣り面映けるお武兵衛のさねて今曉層お火の付たる如く變火よて彦内實娘彦など彦周章の上定て彦空腹おぞいべし暫時の間彦休息もなざる様よと存じ手代惣兵衛お申しお那那原來の痴呆ものも彦彦内實彦娘子など驚かせせしよし借々失禮よろしく彦詫給るべし莫説此般の燒失彦心勞といやなら怎の少し計のと彦家業の高のまれふる青園盡燒よ成たるとて高が大根蕪又家土藏迎も三四貫目の估價少しも彦心勞お及ばせ則ち普請料二百金彦合力お彦請取下さるべし此末とも彦夫婦の安樂お暮させせし借此提盒の彦見舞のまゐりし彦彦彦らざるよまたく一兩日中も彦彦彦べしと立歸れば久兵衛のひたすら武兵衛お面映ひ既よなりて見送りさも嬉し氣お見へけり夫失火して雨と喜ぶとい愚人のたとへ此久兵衛のよなるべし上人熟々と久兵衛の悦ぶ躰と見て嗚呼獨賤の心なるやと打観じて居られしお上人夫婦のものお宣ひけるいひかし唐の那某といへる人あり二人ともよ眞卒朴直の人よて固睦作りて渡世とせしお或時睦の中より一ツは瓶と得たり開きて見れば眺々たる

黄金なりし妻の夫悦んで是天の賚のこ取らんとせし夫のいづく天よく物と生ずといへども播種ぬものと生せず今我力作せ種播きて空く金と得るの不祥なり今我の二人の力作して喰へば餓るまともなく寒ゆるともあつく日として足らざるとなし箇程の實有ながら那ぞ不祥の金と得んやとて本の所へ埋たりと聞隣なる人はとらんとさまく尋ね捜せとも一物もなしと其後の夫婦の人次第と稔と得て富貴ふなりしとなり今足下も又由縁なき人の財と得て家と復起せんとするの哇の金を得る人の如し我又熟々武兵衛の賤賤と見るふ太だ兇惡の相あり必ら老禍害出來るべし甚底由縁もなき人は金銀許多と與ふるの究て深き望の有もへ成べし儻其望を協ひなば幸いあるべし叶わざる時の其金と得たるほどの禍害免れず了りの累練の愧めを蒙り其時干悔倣といへども及ぶまじ黜と承まはればお七と武兵衛へ送らんとめざるよし儻娘氣武兵衛を忌嫌ふ狡屈たる心より怎麼誤謬を仕出さんもはかりがたし其時彼刀狡等が豈二百兩の金と棄んや赤裸にしても取らずよの置まじ能々思惟し給へかしと曲折戒め給ひけるよ女房も涙と流しいと難有き上人の侈戒教かると悦ぶと限なし久兵衛も今更會得の様お見ゆれども何分油屋が二百三十兩お總纏萬望聞女お七と

誑し賺し淳落して武兵衛お送らんものと罪業も報も忘れはて面と併てひたすら耳を聳して聞居たり

④お七吉祥院にて吉三郎は懸慕惡僧辨長文とひらい武兵衛へ内通

却説久兵衛の本郷の諸請お取付晝夜となく急ぎけるほどよ過半修理も出來悦ぶと限なし茲は當院内よ吉三郎といふて漢の彌子瑕和朝の業平と叫倣美少年有り江州安井源次兵衛といへる人の二男なりしが此源次兵衛日連經宗信仰ものよして二人の子あり兄を家督とし弟の出家さすべしとの願なりしか共家室並に諸親類も打集り許多生みせる子ありあらそはしとれ鏡の同胞的此件ハッ延引然るべしと諫れども曾て聽了なく俗諺も一子沙門よ入れバ九族天よ生ぞ如箇の大功德お甚底不足かあらんと竟に江戸駒込吉祥院日峯上人へ懇み出家せべしと登せ置たりされバ上人も吉三が伶俐ゆめで給ひて只管教戒給ひしよよく師の遵守り適れ後々の善出家よもならんものと末頼もしくぞおぼされけりされバ八百屋久兵衛家内い不圖も火變よ出わひ吉祥院よ身よよせ普請成就までいとくらし居けるがいつし久兵衛家内もの此吉三郎と親しき分説聞娘お七の吉三が優お窃なる風姿お憶浮萍れりあふれて

の言葉と戯めて挑むといへとも吉三郎の素來出家の望もあれば女心擾とせうもなくされ  
 ば春風勝ふて楊柳動の謠言岩木ならぬ身のなと悪らめ或時吉三獨り書院ふ茶を挽居たり  
 けるよたゞさへ侍寺の物さびしきよ寂々として眠と催し居たりけるが七此光景と観るよ  
 蓋世よの珍らしき人も有つるものから紅粉とあらすして自然の國色わりと不思も吉三の  
 艶と打眺め恍惚として有けるが婢女の杉の何心なく來かゝり此隣蹊と見て借の幸ひ人目も  
 なし兼ていお七様の懸幕ひ給ふお方と媒酌せばやとろとさし足してお七の負と確とてバ  
 お七のはつと打蕪さまり恐し誰的あるやといふよ吉三も目と悟し三人顔と面對して莞爾と  
 慳へば杉のひつしりお七の手と扯さ吉三の傍へおしやられおもわ吉三よ行當ればよ杉  
 の甚底をそるや吉三様の妾ごとき醜婦と那や相人おなし給ふべき深く言かわし給ふお  
 方のおわしぬるととさらすやかく隠れたるととかの侍方のよろし給ひいさだめて頼み角し  
 給ふべしなど吉三と吃とをり目と睥睨て言昨らへけるお吉三の總て滿面と朱めまけし  
 からの言と宣ふものかな嬌婦よと油屋の何某と深く言かわし給ふお非ずや儂等ごきの桑門  
 よ何の言かわせし婦人おらんやなどたがひよ言葉と挑みけるはと杉のいと干氣のり花

よ嵐月よひら雲吉三様もよいかげん萬づの杉よ任せ給へと一間へ二人とおしやり〜我身  
 も何とかもの塞しく勝手のかたと親ひ居けりお七のいと身も揮ひ物言とさへ覺急なく顔  
 もわからむ薄紅梅いとばぢらひて見へけれバ吉三のお七よ打ひかひ嬌婦の誠篤怎やあだお  
 におもひ參らそべさされと儂も沙門お入ぬる身なりせば若妻りがわしきとの有てハ師の侍  
 坊へ面し破戒の罪と怎麼おせん嬌婦も復頃日は風話よの油屋何某の方へ嫁馬給ふとさくさ  
 れバこれ二人ながら新罪と犯せるおわらさや素來儂儂ごとき土郎的お稱され給ふると  
 いさだめて當座の戯れならんさるおもあれかし譏あさ人の唇齒又恐るべきおわらさや善  
 々察し給へやと打宥めけるお七の言句の唯へさへなく落ぬる涙はらへとも〜不止了  
 何とのれもひけん忽地軀と跳らして庭の井戸へ飛入らんとなしけるもへ吉三大いお慌忙お  
 し留め其故と索ねけるお迎も妾の願ひの協はざる時のかくあらんと兼てのかくご郎の白  
 情の妾の科よしてさらお郎の過よわらさ只管放ちて死しめ給へと争ひけるよ吉三も今の  
 鐵石の念もくだけお七の心の切あるの甚低や儂耳岩木ならん若這の現れなバ嬌婦の今死る  
 とバ必ら我と一所よ死出の田長とあし給へとお七と引寄せ抱さまめ借おとはかあるさるよ

しとなり後の世までも唄はれぬると是非もなき光景なり茲に當院の髡頭を辨長といへる醜頭陀あり跋め吉三の男色を慕悦いろく口説けるといへども却て慚辱められ望外の光陰と送りける中又もや八百や家内の出来るよお七の色香を迷ひ臭さものと身去らすと或ひの抱付まなだれ屬只管戯れけるよぞ婢女の杉おまたか耻しめられ是も叶わす彼も爲らぬ痴呆の一てつ折と窺ひ居たりし吉三とお七の蹊蹶と竊の探り出し寔とみされど究竟のとなりと油屋武兵衛ひとり入て吉三とお七のゐるなし言と告まらせけるを只さへ邪智ふかさ武兵衛主従此蹊蹶を打さうて大いふ憤はり借の是迄お七めい右や左と言延せしも必ずかの吉三めの有もへおのれ今おおむい去らせんものと辨長とまめし合せ猶もよふと窺ひ居けるなり

⑤安井家の士利倉十内吉祥院へ至る油屋武兵衛狼藉十内を撃る談

却説吉三郎の久兵衛の閨女お七の戀情棄つたくよしや此身も後々の桑門もなしぬる軀なれば墨の衣ふ容姿とかへなばお七も又その上る慕ひまがるしと有べからばと思惟し低假令の戀中なりし雨の夜雪の旦かよひくの數つもりて今は猶と言交しぬる言の齒唇つさしな

く殊更お七の油屋へ嫁入るとの風説高ければ心よからぬとよおもひ或の僻言或のうらま又お七の吉三の心をひたふ狐疑古郷の雛兒おめでさせ給ひて妾の疎く欺待給ふなどたがひお憶ひ余りて后の閨房の私語といなりぬかく切なる戀愛るれば甚低となく衆目の關ようたわれけるおぞ上人風便おきまじめし給ひよりく暗お吉三郎へ教化倣給ひけるとなり茲お江川高鳴家の執太夫安井源次兵衛二人の男子兄源次郎の嫡子なれば家督の名蹟又弟吉三郎の二男なれば父源次兵衛の望よよつて出家成まめんと駒込吉祥院へ託し遣しけるが恁度量らん兄源次郎假令の疾よ臥けるが頃日了よはかなく成果けるよぞ源次兵衛他家より嗣子と求めんと商議なしけるといへども母の深くも這と歎き萬望弟吉三郎ととり戻し家督相續なさまめんと種々歎き悲しみけるよぞ親族も打集りて此義の甚低さま吉三郎と呼戻とみおまかじと茲おおひて源次兵衛終お這議よ同し家の臣利倉十内として江戸駒込吉祥院へ遣し兄源次郎相果れよ付名跡相續致させたくまれよよつて暹頃自在のましくいへ共右や上るごとく安井家相續の義よ涉坐いへば甚麽吉三郎涉暇の義よろしく涉聞了願ひ參らると且些少の至りながら別幅の通り進獻仕まつる所と色々音物ならびお方金千疋としてさし出しけ



るよぞ原來無慾原慾の日暈上人まづ一應十内ふ會釋の言葉了且別幅の音と辞して宣ひける  
 の安井氏の使節事新しき事を仰いものかな抑々父源次兵衛どの吉三郎をして當院へ懸  
 み越され給ひしと假令ならぬ佛縁とおぼしめし分られてのとならせやされば吉三郎よかき  
 りての他境の弟子のよふも。おもひ侍らわを頃日既も學問も長經釋讀誦も出精のとなど  
 の運ふ必らず剃髮なさまめんど。ねもひるたりし所なれば吉三郎を返しやさんと努々應ひ  
 ひまじと言まき給ひけるよぞ十内猶も身を運たりてやけるの上人の涉立腹重々の涉尤も去  
 ろから嫡子源次郎息才よて其うへも吉三郎をどり戻さんと爲る涉憤はりも有べきはづ怎  
 麼せん家相續なりかたきよ付涉願ひや上るとなり強て這義涉出届け下されたしと頼けるよ  
 ぞ上人又宣ひけるの兄弟余る時の出家なさしめたらぬ時のとり戻さんとの太ご其意得のた  
 し武家の貴くして佛家の尊からずや何ふん這義の涉歸りありてよろしくやさるべしと宣ひ  
 けるよぞ十内もはらとたて此上の是非もなし上人涉選與なくの某し偷出してもつれ歸らん  
 とたがひよ闘争止ざりしのが卒達ふ院内諷動しく和尚も十内も自己の闘争をやめてまづ勝手  
 へ到り見れば油屋武兵衛手代惣兵衛と引連其外狡徒漢子どもなひ來り武兵衛まづお七が方

より吉三へ送りぬる文を懐中よりとり出しその儘吉三郎の誓りと引抓を喚叫罵りていふ若  
 冠狗偷よくも儂等が女房お七と姦婦ひろき我睛目と掠しよな間夫の罪の五刑の中最も重し  
 若冠の如き邪曲艶冠髪己來の見せしめなれば廳所へつれ行逆着る行いせんと自ら拳と固  
 めて撃と三四十内這光景と見て跳隔て武兵衛と對していふ其許の立腹のさるとなぬら必  
 究其元の涉内政の不埒より起ると某しも遠方より唯今漸く罷りましたるとなれば深き隣隣  
 の委曲存じいねどもお内義より吉三郎様へ送りし文とやらそれの乾とまたる證據ども做  
 ぶたしお内義より吉三郎様へ送りし文ばかりよての全く乍と片便よして二人よりとりかは  
 せし証據なくての罪よおとしがたし其上其許も血で血を洗ふ恥ならせやよく一考便仕  
 給へかしとをし留めけるよぞ武兵衛惣兵衛猶々いさり出し悪辨長と呼出していふ過刻より  
 いつくのお侍士かひえらねどもかけもかまわぬ涉世話運頃涉苦勞なり左はとせよまが見た  
 くの運的お涉尋いへといふより早く辨長進を出既よ口を發かんと爲けるよ八百屋の下女杉  
 お七の遣ひお來のり此躰と見て折めしければ小影よ立彷徨て有けるの武兵衛の縦恣辨長  
 が邪計爾かねて跳出で十内の前へ手とつかへ婢女の八百屋久兵衛が下女杉とやものよて

ございの手まへの娘は七様のいまだいづかたへも縁屬の義の定まり不申最もまれなる武  
 兵衛様の度々の所望のよしなれどもお七様の中々武兵衛の所へもくとい扱おけ面  
 貌を顧るとるへ邪忌よし又たどへどのよふなよい出世なるといふても脇へ嫁入の忌ど  
 のとまして那武兵衛の所へもくゑんりふつくないどのとなればお七様の武兵衛嫁でも女房でも近  
 付でも奈でもござりませぬ夫もへたどへ吉三様と戀愛があるふまた處の奈も武兵衛の構  
 いぬと客氣とるなら女房ももつてからまたのよいと理の當前と憤ければお七様の詞  
 謝へかねたる武兵衛の我設醜女態の切れ過たる鄙賤婢女目よもの見んと跳躑るゝ透  
 さす十内杉をかまひ刀の鏝めて武兵衛の額とはつしと撃つばり狼藉と惣兵衛辨長左  
 右より打てかゝる心得たりと左足の速業三人均しく打のめらし刀と引振さんぐゝ  
 一撃耐し汝等抑々這吉三郎を怎的と思しぞ荷くも江州高嶋家の家老安井源次兵衛の息男汝等ごとき  
 の土部夫として無恥の打擲命をらぞの殺出めお七と已り女房なりと偽る耳ならせ長  
 ろうでの寺と見込傍若無人のふるまい身動きもせずと腕との生別れと鬼神も  
 挫しぐべき勢ひも武兵衛主従の伏たるまゝ身動きもせず打倒れ居けるが上人座と立給ひて辨長と引  
 起し汝生疾中々出家と做べき者

よあらず今より長く師弟の縁と絶ぬるまゝ勝手次第は還俗して恣まゝ悪事を  
 做よと首筋爪で門外へ突出し又武兵衛主従と扶け越し給ひ其元の悪心とり直さ  
 せんば後必ら老禍害あるべし這回の十内どのみ詫言して助参らせし後々  
 とさつと嗜み給へとされも同じく門外へ突出しけるよぞ武兵衛の骨々  
 碎るごとくゑれ共我慢のへらぞ口罵りちらして立歸る

⑦ 利倉十内吉三郎へ加三諫言一母どお杉お七へ異見の談

日置上人の過刻より寺中の譟動世間の聞へを憚り給ひ只管心煩なし居られけるが十内  
 の一擧の働きとかつ杉の頼智のなと處よて武兵衛主従の逃去りけるといへ共只納らぬもの  
 の吉三郎とお七が身の上上人まづ十内吉三郎の兩人を房裏へ招きて宣ひけるの武兵衛の一事  
 の放蕩よよつて不慮もお七吉三郎の讒の現はぬれば是非なく明し語りひはん過去頃八百や  
 久兵衛失火あつた當院へ落來りし縁のはしとなり八百や家内逗留の中甚麽ら  
 方當離齧どつゝい痴な契約も出來たようと思僧と見込んで頼みまされし源次兵衛どの  
 手まへ奈與道説有べきことよりく意見も加ふれとお七が退ねば  
 ちららもうの氣次第も募る氷の出端ア呆などや武兵衛は金の借在もあらば是非お七の油屋へもかき  
 ば成まいそふ成とこちらの

方よりお七の生ていぬとの跡蹊遊近出家の願ふ生れ佛經讀誦の傲すしてお七吉三の身の  
 上と日夜あんど煩ひて憶の安さ閑もなし那の勃海は比翼魚有行とさの雌雄相ならんで泳ぎ  
 則ち人あ獲ると時の必らず共死と同うと又湖水は鴛鴦といへる鳥あり雄死する時の雌その  
 尸ねと抱て日と經ずして共死せるとあり畜類鳥類さへ愛慾深ければのくのごとくならせ  
 や今朝十内どの國元より其方と迎ふ見へし時のその嬉しと早速手渡しさんとのいおもひ  
 しかよくく三思と透らせびよつと結隔若氣の無分別から世間有格な心中なとせまい  
 かと態と心よもあらぬと聞ひし其方お誤ちなさよふとの師匠の情お七ごとりふつ  
 どかもしきつて國元へ歸つて親の家督相續師匠への孝親への孝君へは忠義お七獨さへ棄れ  
 ば三方四方の皆納るむくつける出家形氣と必ず恨んで呉那哩と未來と曉と身身も師弟の  
 恩愛棄つたたく汚衣とぞひたしける十内の最前より上人の汚教化の胸もはりさく難有涙吉三  
 郎の何思ひけん到達抜て誓りの中とふつたりとし切又振袖の袖も同じくわし切て下る置今  
 更未練のましくいひ得共退退れぬ義理と義理なれ共上人様の親より篤き汚心配且十内の  
 精心お七ごと思ひ切し証據の此黒髪と絹の片とで儂一生の遺物とも見よらしと必らせお

七へ汚渡し下さるべし逢ふてい却て涙の種いざや道より立歸らんと口より言と立かぬる上  
 人涙をばらひ給ひ潔白くと自ら旅の用意まで汚心属給ひし十内の只上人をふし拜み凡  
 慮ならぬ師の汚思名残のなれいつまでか盡しつたしと泣入吉三を種々お諫いさめて立歸る  
 お杉のけふの騒動と吉三郎の國許より十内のむかいよ來りしととも委しく談話且吉三郎よ  
 りお七のものとへ送りし文をさし出しけるよぞお七のうれしくとる間もあろしとひらき見て  
 這とも甚低せん上人の段々の深き汚情け十内の忠義の心盡し親の爲先祖の爲大恩ある師の  
 汚坊の汚教化の從ひ今宵中よ當地發足とるもへふるなたの随分息才で油屋へ嫁入し双親の  
 心と安め又もや汚るんもあらばゆるく汚目よかゝるべし定めておれまですかわせしとの  
 棄も皆もてあぶし事となりぬるとどくれくも約束事と汚あきらめ下されいどの文句今宵  
 を過しるば吉三郎様必ら古郷へ汚歸り有らんと疑ひなし怎れも働ども今一度逢ひ参らせ  
 いての妻一心總て恐びのたしと只怪けよ狂へるが如く眼逆立喘息して表面の方へ駈出んど  
 なしけると杉の驚きとし止了ども應はき這光景も母も共々跳隔て多方賺し宿め母竊よ吉祥  
 院へ人を走しめ吉三郎のいまだ二三日も逗留のよし此方へ汚アしまし下されたし娘お七へ

かう狂氣のごとく今宵中よお寺へ参るべきの容姿なれば此よしよろしく頼参らざることを  
 遣しけるおど上人其旨承允ありて聽て八百屋久兵衛方へ人と遣し右の一件や入れけるの  
 もへお七是と實なりとおもひ茲おゐるて這夜のよふやく吉祥院へおくとお七の止たりといへど  
 も夜もそのら寐もやらす只管もたゑくるしみ居ける母と杉の多方々相談なし處せんあの躰  
 ならバ吉三郎どのよわかれての生くる居ぬとの躰躰まづく今しばしの所のやはり吉三と  
 のの寺よ居るふんよしてお七と詐しその上上人様ともだんごふなしとつくりと合點のゆく  
 よふよ異見としたらまんざら得心のぬぬとい有まいと杉と二人が密談して其夜のまづ二  
 人とも打臥しける

⑩久兵衛迫てお七を油屋へ嫁んと欲事お七火と付けめしとらるゝ事

油屋武兵衛の吉祥院の狼藉よ奇核痛お逢ひ心よ怒りて久兵衛の家よ横冠お七の應否と絶聞  
 と只願迫盛督責とると酷虐ければ久兵衛大いよ畏縮一言答ふるとをまらず漸くして道言と  
 既お就れり今些しの塵碍ありぬれば明日の必と返事なしやべし千里の遠さも漸く一里の近  
 きお及べり津よ入つて船と覆へさの甲斐なきことならずや兎角性急なるの事の防礙明日の娘

妻よも中層采艶應否とやべしと武兵衛といろく選し宿めて歸らしめけれども今さら施ま  
 そべき手断もなく所詮恚も度も打ひかき妻娘お憑み見んものと二人と二階へ誘ひ素々われ  
 の素河内の産れ十三の時此家へ丁僕奉公よ來り朝夕の御恩お預り年歴るよ應がつて内外の  
 とのわれよ任せられ後よの久右衛門様の後跡よもと身よ餘りし御厚恩夫さへ有るよ東道久  
 右衛門とのれもひも寄らぬ御大病瀆死の時の枕下よ召れ家業と遣らず御譲り怖れふや自分  
 の妻よ家來の我よ娶偶べしと御盃まで下されじ有るたさ骨身お徹り夫よりして家業と守  
 り一粒一錢も疎よはせせ手足拘搭拮据とも秋風落葉よ資本も消へ用はせして氷の釋るのこ  
 とく甚麼して富有の人よ便り雨露の恵も得ばやとおもふ處お油屋武兵衛のお七と嫁と欲し  
 とて若干の黄金と出し尙また變火の其後も道家普請も仕て思お恩とかけ今の甚低とも做が  
 たし何とぞ先祖への孝親への孝行とおもひ武兵衛の方へ往て呉れねば急卒焦眉の磨難とな  
 り家よ滅し世業とうしない久兵衛様や久右衛門様を無縁おとる是這の母も女房なごらも我  
 が御主人看下難爲を見せての先御二人よ義理立を親父の爲お苦界とる娘世間よの澤山よ有  
 ららひどうぞ得心して油屋へ往て呉と苦話述べ妻の顔舉げ抑貧富の空門雲のごとしたと

武兵衛が嫁を配より乃索苦界の贖の售れ行末遂の見へてあるお七が奇迫た心から謀もの  
 との有たらば鬼の餌食も同じまど箇程邪見の其憶でたとへ身上福貴なつたりとて先立靈  
 の悦ばん蓋しの心やと霍るはして血の涙止めかねたるはかりなり久兵衛言句の唯もなくお  
 七の泣目の涙とはらい父よむかいてやけるの傍父母懺ふ歎きと懸け罪ふかさ此體成るほど  
 油屋へ嫁まきよふといろくとして母の手とり二階をたり久兵衛の胸かまらとる親子の  
 別れ憶ならずも已の床臥へ入りよけり借夜も更ぬればお七の竊と忍び出怔悸胸と両手抱  
 へ明後日の吉三様故郷へ帰る日一日迫る道身懸しけ夫やなつかしの郎やと狂氣のごと  
 く身と腦り立たり居たり願ふお七もひ附火の思案修羅の巻や懸路閣二階の隅みたる文庫の脚  
 紙ふ蠟燭の火と刺點せば揺と燃たつ焰の煙り其儘襖もへうつり表の格子へ焼出れば速叫  
 まる火事よと表の騒動久兵衛の愕り轉倒表のごとと走出る引違へて武兵衛の馳入見れば怪  
 敷お七の兇相那則大膽不敵の女郎犯罪とさつと見届たと小腕とつて擔着れば其手は喘着咬  
 傷ると上より下へ衝むとせお七の落る其へうし武兵衛も共直倒其間も救火の大勢

び奔入く防鎮よど難なく放火の鎮れり行老主保赴廻り久兵衛夫婦娘と招呼大いお叱つて  
 中けるの去年より兩度の出火賊も就談不用心の作行道以後當丁のさし置がたしと音り  
 怒ればお七涙ながら云けるの今宵の出火のまつたく父母のまるとならせ去年の火事おれ  
 寺へ落行逗留のその中お憐愛れ方逢ひ染てうれしとおもふ甲斐もなく近日お國へお歸り  
 との事抜てもかふもれもふまかせず跡の折も火事お寺へ落てうれしお見今度  
 もお寺へ落るの嬉しさをし火と放たら彼のお方お逢れうかとおもふてまたのが親へのね咎  
 め私に付た今度の火外は科人の傍座りませぬ阿鼻焦熱の苦しむも露ちりほとも厭ねども最  
 一度吉三様へ逢て死たいお顔が見たい爺さまや嬢々様の猶り本の處に置て汚看顧なされて  
 下さりませとの自告も皆一同悲しみ涙火を滅しぬらん苦雨地お管理の幹官渡邊隼  
 人入來れば行老主保出迎ひ正廳へ通しつれも腕まり今夜中の出火の隣裏並久兵衛娘自  
 から白狀の始終悉一ツ上れば隼人おけるの東西も辨まへぬ娘ごころ扱々悲憐のまとなり今  
 一應考覆とべし即ちお七を呼出し辨明なしけるといへ共初めよかわらぬお七の自告火を搶  
 たるの私と謂ふを打消二階の間とどり仕廻ひのせつ蠟燭の火などおて誤つて出火となること

儘有とあり定めて左様のとならぬと寛宥の分説は即役人か七親々のいふ及ばき皆一とふ  
 頭と下げ有難涙よくれける所へ武兵衛忽俄奮出涉役人様おの女とおほしめして涉ひい  
 きの沙汰甚だもつて心得がたしお七の火と放いどの此武兵衛屹度見届いこと置りければ  
 人の打點背汝くわしくも知りあたるものか左それお七の火と放ぬ最初より知りつらん  
 お其節の只見ぬふりとなし事の破れ及んで人へ傷ふ大悪其上官注管理とも憚らず出過た  
 る荒唐的夫れ打居よといふより疾く救火丁的鉄尺ともつてまたよか打耐しけるみぞさし  
 もの武兵衛首と抱へ鼠のごとく逃去けり隼人の行者と近く招き今武兵衛が中條もあれば  
 此上の私しよはからひびたし重て宜しく審録と遂べしされば飯結まで願葉へ入れ置くな  
 りと竟お細と打縛れば夫婦の款と伏轉び腸たよ斷續の裏聲あばしといふも空吹風五臓と絞  
 るかなしさも憂も涙もあらくれ武士引立〜つれ歸る

⊕日登上人於七の助命願ひの談上人胡蝶の夢よて悟道と得給ふ事

吉祥院日登上人の八百屋於七の助命の爲お日毎は渡邊隼人の宅へ來り種々願ひと盡せど  
 も王法の式お懸り脱るべしとい見へざりし今日萬望一許の場所我命おかへても救はん

ものと普留那の辯舌と爛らし一向は免許のたと乞索るといあるとも隼人一圓領承なく上人  
 よむかいていふ夫釋氏は佛法あり政事より又王法あり今上人のお七を救んと身と棄て乞ひ  
 給ふの人と助る慈悲善根某しとても怎ぞ煉意有らんや殊更前後の差別なき小娘子見るよ不  
 便の某とても上人は替らねども甚低せん其夜武兵衛が讒訴といひ又鎌倉中よ巡按の巡街私  
 よ罪とかるしめ賄賂と得たりなど風評ありて我役職の碍げ耳ならず君への不忠如何お  
 せんされば天下の王法は是非もなき事と思し召れよまかし今一應主官へ申込ごともあれ  
 ば夫を憑みよ待有べし上人の大慈悲善心などや感應なからんやと種々なだめてのへしけ  
 り欲レ盡三出尋一那可得三千世界本無窮日登上人の室々として寺に歸り權者智識の身のう  
 へも定まる業は是非もあし猶も憑の鬼子母神と燈明ふかくさし照らし經音高く聲打ならし  
 今朝よりの勤行お夜もはや初更に至りし頃恍惚ともなく夢ともなく一雙の蝶花園の廻り愛  
 然として飛交ふ風情往了還了翾々顔々顔之顔之左よ靡さ右よ背き網羅の繩り別れの戀ひ  
 露と昏め花を吸ひ翼と撲鬚と搦し緝々として且戯れ且遊べりはや黄昏の影くらく雌雄の小  
 蝶の四翼と収め花の下へ肌とりおふて宿りけり上人寂々と打觀了實や果敢ものと風蝶の夢



またとふ只且短き夢の間も妹背の契りもあればまそ道箇むつましく有ぞかしお七の夢の危  
 ふきも十羅刹女の救ひも托假も胡蝶の容と變じ我も告しめ給ふのや嗚呼有のたの佛縁やと  
 俯し拜みく嬉しさ餘る法の園もしや夢見し蝶々の眼のあたりあ有つるやと障子を開ひて  
 燈火とうつして尋るその中よ夢よいつらで二ツの蝶灯火目をつけて入んとぞ道仕爲たり誤れ  
 りと衣の袖と打はらひ拂へと迷ふ夏のむし道方のはつと燈火と吹き消間も呀々悲しや向ふ  
 お懸る佛前の灯火の火よ飛込で楯を盛めて焼死たり上人手燭と碯と藥定まる業の佛力よも  
 及ばざりしか以何令衆生得入無上道速成就佛身南無沙法蓮華經

○附録

○八百屋久兵衛の妻

お七の頰繫は納れし日より痞積胸は衝逆と三四度次第お瘡痕れお七の罪せられし日より一  
 月ばかりと歴て遂は亡しく成果けるとなり

○安井吉三郎

安井家と相續し後よ非業の死となせしときと大よ悲み枕よ臥て起ざりしと嫡母の諫めて於

七の追善のたのごとく供養し後又菩提の爲とて滞佛と勸賞したりと聞り東土入口くも有る滞佛の吉三郎出家して勸賞せしとの誤謬なりお七の以前より有佛として吉三郎がお七と追善の爲に建立せしとの跡なき空言なり

○奴隸彌介

お七の罪業見るよまのびを直ふ吉祥院へ馳入出家し日峯上人の弟子となりお七の菩提と吊ひしその後 檀林へ入て能化となりしとなり

○下婢お杉

お七の死後よ吉三郎と慕ひ種々の態匣ならびお七の戒名と春よ負ひ遙々江州高崎へいたりしお吉三郎のいとく憐愛お七の相像と逗置き後似合の良夫も出来近き頃まで安井家よ目出たかりしとなり

○悪僧辨長

寺と退出されしより乞食となり江戸中と彷徨ひ徘徊けるとなり

○油屋手代惣兵衛

相州箱根に下つて駕籠を昇雲脚仲間と立交りて在けると見たる人ありしとなり

○油屋武兵衛

元來濕瘡の病有り其うへ吉祥院にて十内よ擧れ頭領の創癒を其上先頃渡邊隼人の属下の的お手ひとく撲れたる傷みて歩行なりがたく人の勸めよりて但馬へ湯治を行たりしよ湯毒よ中られ一夜煩悩して翌朝其所にて死したりとなり本郷の名跡も今のはや差少ばかりの遺りゆれどもそれさへまゐる人も稀なりとぞ

○八百屋久兵衛

妻子と失なふの後跋めて夢の覺たる心地して俄お桑門となり東家の庵西家院よ身よよせ漂よひ徘徊けるの終よその終る所よしらすとあり嗟乎吝嗇貪慾の人よ害し身よ失なふよと箇のごとし初め日峯上人と女房との違覆と這ときよ喩らば地獄畜生餓鬼修羅道豈只且の患ひを遺さんや

八百屋 胡蝶 夢大尾  
お七



明治二十年一月二十日出版御届

同 年同月同日別製本御届

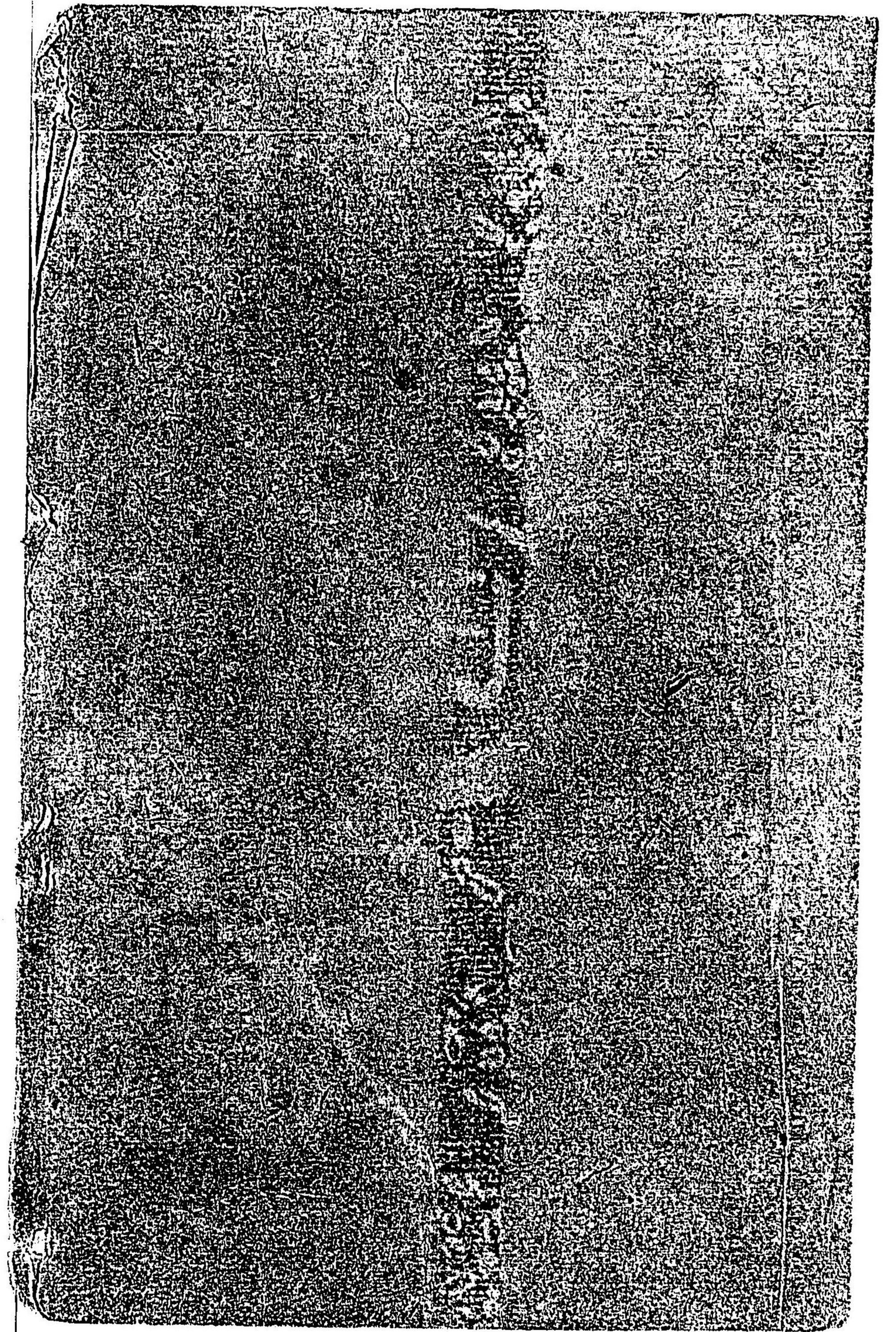
同 年二月 出版

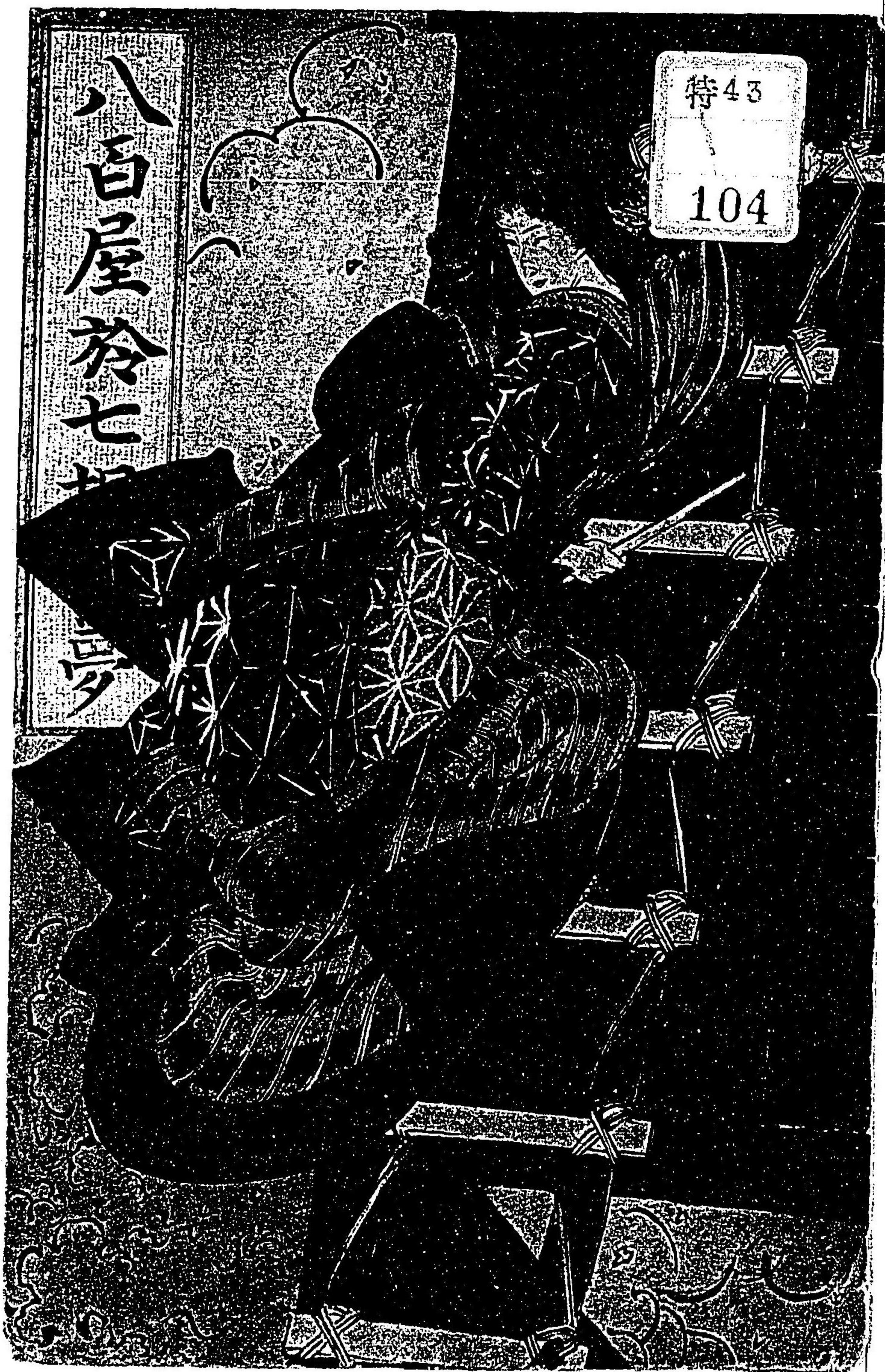
※※※※※  
定價金四十錢  
※※※※※

新潟縣平民

編輯兼出版人 長井庄吉

芝區烏森町一番地市丸幸太郎方





091491-000-5

特43-104

八百屋お七胡蝶夢

長井 庄吉 / 刊

M20

DBN-2460

